

## 協同組合女性活動促進視察調査団報告

ICA女性委員

全国農協婦人組織協議会長

竹部 喜代子

1993年9月5日～12日かけて、表題の視察団が、スイスではICA女性委員会及びICA全体総会に出席し、スウェーデンに立ち寄り、2つの協同組合の「高齢者福祉」「環境問題」へのとりくみを視察してきました。その際女性委員会で報告したカントリーレポートも併せて掲載しました。

### I. 参加日誌

9月4日の富山発18時の全日空便で成田空港に入る予定で、会務処理に当たっていたが、戦後最大風速の台風13号発生の際は、風水害災害が多発して人命を奪われた異常の年だけに、未然防止対策への緊張が高ぶり、4日の本土上陸の予報に備えて陸・空の交通機関ストップの情報が流れると、上京を促す電話がしきりに入り、意を決し帰宅してトランクをまとめJRに乗り込み、台風前線の激しい雨の上野駅に降り立ったのは3日の24時近くであった。台風が予想より静かに日本を通過したことは幸いだった。4日は都内から成田のホテルに移動し、翌日の出発に備えた。

#### 9月5日(雲) 出発

団員は集合の10時にぴったり揃う。農視の稲村様が出国の手続きを信耕事務局に説明し、細やかに指示をされる。山西青年・婦人課長様の見送りを受けて一行6名は元気に出発ロビーに入る。JL 405便は入航便の遅れから

飛行体制に入ったまま待ち続け13時10分離陸。

12時間余を飛行し、フランスのシャルル・ドコール空港に入航する。ジュネーブ往きの出発ゲートが最近変更した為、右往左往する搭乗者を見て乗り換え便に余裕時間があり一同ほっとする。コワントゥラン・ジュネーブ空港に22時到着。農視が手配してくれた駐在員の方の出迎えに一同の顔に安堵の喜びが走る。信耕さんはじめみなさんご苦労様。

#### 9月6日(晴) ICA女性委員会に出席

ラ・リザーブホテルは実に静かで庭が広い。朝食後食堂から見えた木の実にひかれ庭を廻る。この研修に参加するため次々と押し寄せる会務や家事管理に追い回され、空を仰ぐことすら惜しむ暮しから開放されて久々に異国での爽やかな空気を思い切り吸い込む。

13時、ICA女性委員会がILO本部第6会議室で開催され出席する。

スイスのローズ・マリー委員より歓迎のあいさつに続いてカタリーナ議長により会議が進行される。書記席にムニエル・ラッセル氏のお顔があり、ご協力に感謝する。出席者は14ヶ国より18名の委員と日本のオブザーバー6名、他関係者出席のもと開催。

ICA東京大会の議事録承認、女性委員会執行委員の改選期に当り立候補の届出を9月7日9時締切とした。「女性と開発」に関わるICA政策他5項の報告が行われた。その他の中では、ICA環境問題の起草文に、最も

深いかかわりをもつ女性の章がないことがあげられ、女性に関する別章を設けるよう働きかけていくことを承認する。また、ICAの理事候補者にライヤ・イトコーネン女史が継続して押されており、特に今回はマルコス会長が東京大会以降退任を表明され、副会長のイトコーネン女史が会長就任を推められて立候補していると報告され、全員当選を期す熱い拍手を送った。

議題の女性委員会の今後の活動と組織体制については、女性委員会の書記の設置および財政支援をICA本部に要請しているが、「人員の派遣はできない」と回答された。今回は、ラッセルさんに特に依頼して協力をいただいたが何とかせねばならないと訴えられた。本部からは資金援助の現行額は今後も続けるとの回答を得ている。但しこの援助額では、書記の委員会・大会の出席旅費と郵送料・電話料で消えてしまう。ラッセルさんは出身組合でコピー等を負担してきたが、これに対し不満の声が聞こえてくると話され、女性委員会の運営のきびしさを知らされて今後の対策が問われた。

#### 9月7日(曇) ICA女性委員会に出席

選挙は事前に届け出ていた執行委員を承認し、議長をカタリーナ女史、副議長の2名を全員一致で選任する。

各国報告は、新しい委員より始められ、日生協湯浅女史と私を含む8名が行った。報告内容は、ジェンダー問題へのとりくみ、賃金差別の撤廃、企業の女性への金融の道のけわしいことが訴えられた。湯浅女史は日生協の女性進出へのとりくみ、国際会議の開催について英語でスピーチし、その努力に拍手を送る。全農婦協は300万人実践運動による女性の地位向上活動について報告を行う。

今後のテーマは、“協同組合における女性”で、①女性と金融問題、②女性と安全問題、③女性と技術問題があげられた。

1994年執行委員会はイスラエルで3月開催するとされ、総会は隔年毎に開催されると聞いた。

男女平等機会均等が、皆様の仕事であることを忘れないようにと議長は閉会で締めくくられた。

14～16時は公開会議として、金融機構についての議論が行われた。

#### 9月8日(雨) ICA全体総会に出席

10時よりICA全体総会開会式に出席する。歓迎のあいさつは、ジュネーブ市の副議長ハイネ氏がされ、つづいてILOマイヤー氏より祝辞があった。

マルコス会長が経過報告の中で「農業経営は小規模農家が多く、家族経営を農協を通して行うことが最もよいと思う。農業は国の政策をもろに受ける職業である。人類にとって肥沃な土壌が最も大切に守られていくべきであるのに、今は充分それが守られていない。消費者の理解が必要で、我々はこれにアタックしていくべきである」と語られた言葉が心に残る。

総会議事が進行し、堀内ICA副会長が役員選挙の議長をされ英語のスピーチで進行される。まず会長選挙ということで候補者のスピーチ、候補者応援のスピーチがあり、投票が行われた。投票用紙350枚は厳重に交付された上、各国代表が投票を行使した。開票の結果、マルコス氏186票、イトコーネン氏の158



ICA全体総会に出席して

票でマルコス氏が選任された。しかし女性であるイトコーネン氏の得票率の高いことに驚いた。ジェンダー意識の世界レベルの高さを改めて知る思いであった。

このあと副会長、理事の選挙に入った。私達は東京大会でも開く機会のなかったカタリーナ女性委員長の報告を是非聞きたいと頑張ったが、大巾に進行時間が遅れており、退席し空港に急いだ。

この夜もアーランダ・ストックホルム空港に着いたのは22時。見知らぬ国でメモを頼りの移動は語学に強い調査団員達も緊張する。無事宿舎レソ・パークホテルに着き安堵する。皆さんご苦労様。

#### 9月9日(晴) HSB(スウェーデン住宅組合)訪問

この朝、通訳の高橋さんが見える。住宅生協全国連合会に案内される。キッキィ・ヨハン部長(女性)よりHSBの歴史とその先見の明を持った住宅改善は、人々の暮らしを文化的にし、HSBへの信頼を築きあげてきたと話される。

全国組織は58単協の基本活動の促進をはかり、政治家へ働きかけも行う。また居住する者同志で住みよい環境づくりをするよう啓蒙につとめている。環境問題ではアパートのゴミ捨てのバリエーションをHSBは持っているが、ゴミ分類時代に入り見直さねばならない。生ゴミのコンポストが必要で、将来はアパートでも使用できるものを開発する見込みであると。またこれからはアパートを新設せずに管理をメインにしていくつもりである。住居組合員の高齢化する中で、氏のサービスとアパート管理人が代行するなど拡張サービスを行い、福祉と経営のドッキングを図って成果をおさめていると語られた。

県単位のHSBで居住権アパート(入居者55才以上)へ案内され、キッキィ部長のプロジェクトを見学した。115戸の集合アパート

は共同の場が広くとられ、室内はもとより廊下にも芸術作品が多く飾られてあった。この国では建設費の1%が文芸費にあてるよう義務づけられていると聞く。ヌクララ活動やサークル活動が色々とりまかれており、修養学習の講師は市から派遣され、図書室の図書は市が定期的に入れ替えているなど、行政の民間施設を活用した地域住民サービスが行われていた。スウェーデンは社民党の長い政権の中で、世界の誇る高福祉国家を築きその名を馳せていたが、財政の行き詰まりから政権交代が迫られ現在の保守連合政権となった。新しい政権は将来の基本的姿勢は変えずに、国家依存型から地域住民や高齢者のパワーを活用して、各々の暮らしを大切に自立した生活が営まれるよう支援する方向にむかっていった。

これからの日本の高齢化対策のあり方に示唆の富む研修になったことを感謝し、キッキィ部長に厚く御礼を言いHSBを辞した。

「明日訪問するスウェーデン消費協同組合連合会を見ていきましょう」の高橋通訳さんの提案で、地下鉄に乗り、メーラン湖とバルト海を一望出来る塔に登り、旧市街を眺望した。島と島が橋で結ばれ、巧みな都市計画は自然美を損わずに見事な都市景観がつけられており、うっとり見入った。

#### 9月10日(晴) KF(スウェーデン消費協同組合連合会)訪問

9時にスウェーデン消費協同組合(KF)を訪問する。案内された広い食堂からは、昨夕一望したガムラ・スタン旧市街を始め森と湖の調和ある美しい景色が眼下に広がっていた。実に美しい!

ブリッテストックホルム生協理事よりKFの機構について説明をいただいた。続いてテストキッチン(キッチン)の部屋に移りクリスチナ・モーラ女史により、開設50年の歴史を持ち、家庭における食に関するバイブルともいえる



図書を発行している。なお、子供向けに研究されたものは、学校教材として使用されているなど、有志メンバーが集まり研究をし、これに基づいた食に関するインフォメーションを流して食と健康の今日的課題に応じている。他多くの活動が紹介された。

ウーラ・ドナ環境問題担当者に I C A 女性委員会に提したカントリーレポートを渡したところ、「日本の農協婦人部の環境問題のとりくみは正しい」とコメントがされた。特に90年代はこの世にあるものすべてをリサイクル化していると話され、自然生態系をくずすようなものはつくらないことに挑戦している例をあげ説明される。

このあと展示室、各種の商品テスト室を見学する。

午後からはマーケットに案内され、午前中説明のあった開発マーク品やリサイクル商品が店頭販売に並んでいるものを見る。有機農産物につけられる K R A V マーク、食糧庁開発鍵マークの品、洗剤の詰替機もあった。肉は生産者の飼育段階からチェックし安全・良質肉に誇りをもってすすめていると専門担当者から熱っぽく説明される。消費者の要望をモットーに製品に万全を期しているこのマーケットは、みんなから信頼を受け客足が多く、繁栄していた。

住宅組合、生協の目的と運営を説明された



洗剤の詰替機



スーパーマーケットの果物売場  
包装はしてありません

のは、いずれも幹部クラスの女性であり素晴らしい専門家であった。大らかな人柄、懇切な説明は解り易く時間ももっと欲しかったの思いが残る。経営者であるこれからの方々は、人の暮し方、生き方に視点をあてて、時代の変遷・伴う生活課題をとりあげ、運動には教育・実践研究の繰り返して組合員ニーズに応じていくを学び、有意義な研修となった。

この日18時、フランス・ドゴール空港に飛び、12日成田空港に着いた。出入り8日間の長い間、5人の若い女性達は見事なチームプレーで旅行事務を処理し、足手まといの私をガードしていただいた。お陰で I C A 女性委員会への出席の任を果し、新たな視野を広める研修の出来たことに心から感謝して止まない。

終りに、この調査団を規格していただいた全中、現地では有賀常務様、松田課長様、そして農観の稲山様、丹羽様に一行がお世話になったことを厚く御礼申し上げて、筆をとどめる。

## II. 全国農協婦人組織協議会カントリーレポート

昨年、日本で開催した I C A 女性大会には、各国の女性委員が多数ご出席され、盛会裡に終了出来た事に深く感謝するものです。

会議では、カタリーナ・アベルクヴィスト

議長の鮮やかなとりまわしにより「ICA女性戦略」がまとめられ、出席の日本の農協婦人部代表に大きな刺激を与え、ジェンダー問題への意識を高めるという成果を得た事を、心より御礼を申し上げます。

これより、その後の日本の農協婦人部のとりくみについて報告をさせて頂きたいと存じます。

全国農協婦人組織協議会（以下全農婦協）は、1988年に策定した長期方針「農協婦人部21世紀への道」の実現にむけて、3年を一期とした中期計画を策定して活動を推進してきました。今年度は二期目に入り、運動期間を1993年～1995年とした「新燦燦計画」を策定し、「つくろう」「まもろう」「つかもう」の前期の柱を引継ぎ、積み重ねてきた学習を土台に実践行動の展開をめざして、「300万人実践運動」を呼びかけ、お手元に配布したレポートに記載してある五つのテーマを掲げて取り組んでいます。

推進にあたっては、まず全国2,909組織での実践例を集めた事例集を作成して配布を行っており、本日はその中からテーマ毎に実践例を織り込み述べたいと思います。

テーマ第一は「食」の問題で、“安全良質な食物の生産・流通に取り組もう”と掲げています。現在の日本では、その安全性に疑問をもたれる食品が多く出廻っています。これに対し、生産者・消費者の共通する課題は家族の健康を守ることを考え、農協婦人部では、消費者の要望に応じて、手づくり農産物の朝市・夕市・無人市の開催や学校給食用に地場産の野菜を供給する運動等にとりくみ、農産物加工も行っています。

加須市農協婦人部では、農協へ出荷した残りの大豆を利用して共同で味噌づくりを始め、商品化にこぎつけ、さらに第三セクター方式により市、農協、グループ会員が共同出資をした会社を設立しました。作業賃金が自分名義口座に振り込まれ、経営も安定し、地域の

消費者からも大変喜ばれています。

テーマ第二は「女性の地位」の問題で、“農業経営・農協運営に参画しましょう”と掲げています。

日本の農業労働の60%を女性が支えています。男性と同等の農業者資格の認定をはじめ制度面における男女不平等が現存しています。そのひとつに「農業士」の認定制度を各県で実施しており、対象は男性がほとんどで、一部の市町村単位で女性の認定が施行されているに過ぎませんでした。平成4年度は前年度を倍加する婦人農業士の認定が行われ、女性が肩書きをもって農業に専心し、活躍する道は開かれました。

農協運営における女性の参画では、小城郡農協婦人部が組合加入についての学習会を地域全体に徹底して開催したことが、農協合併にともない理事の定数を見直す際に、婦人理事登用のきっかけとなり、県下で初めて2名の女性が理事に就任しました。

日本の農協組合員数に占める女性組合員数は12.1%（1991年）に婦人部の運動で20%以上が女性組合員となった農協も報告されるようになり、女性の役員もふえてきています。また、女性の農協運動参画をめざす手立てとして、理事会に出席出来るが発言権に制限のある「参与制」をしき、女性の参画をはかる農協が増え、昨年全農婦協調査で全国で77名と集計されています。緩やかではあるが“農協運動への男女共同参画をめざす”婦人部の常時活動がきびしかった参画への枠を広げております。

テーマ第三は「高齢者」問題で“高齢者と、ともに生きる地域をつくろう”と掲げています。

日本は、女性の平均寿命が82.1才となり、世界一の長寿国といわれます。しかし、高齢化の進行が世界に類例のないテンポで進行しているため、課題が山積しています。特に農村の高齢化は都市と比べて2倍以上の進行率であることから、全農婦協では「家庭介護」

の学習や一声掛け運動の推進をして久しくなります。

横浜中央農協婦人部では、1992年度、「老人の家庭介護」をテーマに学習と実技を習得し、グループに別れて体験実習を行いました。その中から家庭で寝たきりの対象者がいる部員と有志部員の10名がネットワークを作り、活動を広げているグループと、もう一つは地元ホームで無報酬でボランティア活動をするグループの2つが誕生しております。

実態を重くみた行政では、農協婦人部員を対象に「ホームヘルパー3級」の資格習得者養成講習会を農協に委託開催をし、今年度中には全国農協で8,000名余のホームヘルパー3級資格者が誕生します。そのヘルパーが地域で活動するための体制整備を急ぎ進めているところです。

テーマ第四は「環境」問題で、「地球環境・地球環境を守ろう」と掲げています。

環境破壊の問題は、深刻な問題として地球の課題となっています。美しい地域や地球を子どもたちに残すため、一人ひとりが自分の生活の回りからのとりくみが大切です。

婦中町熊野農協婦人部では、環境を守る運動について学んだ婦人部長が、生ゴミの堆肥化を地域全体の実践運動に結びつけたいと願望をもちました。妻の考えに共鳴した夫がリサイクルコンポストを考案し、これを知った婦人部役員が「コンポスト利用で、家庭の生ゴミを堆肥化し、出来た有機肥料で土づくりをしよう。肥えた土で作物を作ると病気に強くおいしい味の野菜がとれるよ」と地域住民によりかけて普及しました。運動が急速に広まり現在300本余が利用されています。そのため生ゴミはもとより燃えるゴミも各家庭で燃焼する人がふえて、町のゴミステーションに集まるゴミがぐーっと少なくなりました。このリサイクルコンポスト運動が他の組織にも広まっています。

申し上げるまでもなく、環境浄化と資源の

無駄遣いの追放にむけては全組織が挙げて取り組んでおり、特に地球人としての正しいマナーを身につけた実践者となるよう努力しています。

テーマ第五は「組織」問題で、「農協婦人部を力のある組織にしよう」と掲げています。

組織活性化の要は、運動を部員に的確に伝え、一人ひとりの声を正しく吸いあげて協議し、みんなが活動参画意識をもつことです。

近年、日本には火山の大爆発、風水害、地震等々による災害が続発し、人命が奪われ、農地が破壊され、火災を引き起こす等の大災害が起きています。その度に打ちのめされた被災者の復興を願って、全国208万婦人部員が立ち上がり、募金運動を起こし、集まった義援金を被災地に贈るといふ、組織なればこそその結集力を発揮して社会の注目を集めています。

かえりみると海外支援では、1979年に「世界の共同組合の子供にきれいな飲み水を贈ろう」の運動を起こし、5,707万円余の募金をICAに贈り、日本の農協婦人部はこの運動の先鞭をつけました。1986年には、アフリカの飢餓報道に心を痛めた婦人部員が募金に立ち上がり、2億90万円余の募金を積み上げました。全農協協は、この扱いをFAO（国際食糧農業機関）に寄託し、アフリカのカボヴェルデ国に3棟（20m×100m）の倉庫を1億5千万円で建設して贈りました。なお、残額の募金はFAOの基金に寄託し、その利子を使って倉庫の修理やその他のプロジェクトを補完する援助活動を現在も続けています。

また、1991年からは、ICA婦人セミナーのアジア・太平洋地域の農村婦人研修生を受け入れ、日本の農協婦人部活動の現場に入ってもらい、交流を深めあう事業にも取り組んでいます。

以上、昨年東京大会で打ち出された「ICA女性戦略」の枠組みに沿い、実践努力してきた活動の一端を述べ報告といたします。